

第3回奈良市アートプロジェクト実行委員会 会議録

開催日時	平成30年2月6日（火）午前10時から午前10時45分まで	
開催場所	奈良市役所中央棟5階 キャンベラの間	
次第	1 開会 2 市長挨拶 3 議事 (1) 奈良市アートプロジェクト基本構想（案）について (2) 平成29年度・30年度事業計画（案）について 4 閉会	
出席者	委員	仲川委員長、佐々木副委員長、青木監事、萩原委員 【計4人出席】 プロジェクトリーダー：西尾氏、田上氏
	事務局	澤野井市民活動部長、松田市民活動部次長、谷田文化振興課長、吉川主査、小谷係長、荒益、佐藤、西崎（以上文化振興課）
開催形態	公開（傍聴人 1人）	
決定事項	<ul style="list-style-type: none"> ●事業名称「奈良市アートプロジェクト 古都祝奈良」箇所は確定。末尾に“2017-2018”を入れるかどうかはチラシ作成段階で決定する。 ●基本構想4 実施体制について、「事業の実施にあたっては～」箇所は「ディレクターもしくはプログラムディレクター」という文言にする。 ●平成29年度・30年度事業計画案を承認。 	
担当課	市民活動部文化振興課	

議事の内容

<p>1 開会</p> <p>2 委員長挨拶</p> <p>3 議事</p> <p>(1) 奈良市アートプロジェクト基本構想（案）について</p> <p>事務局より説明。</p> <p><u>サブタイトルについて</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回、事業名称「古都祝奈良」の後に事業の説明となるような文言を付けるご提案をいただいた。事務局案としては、前年との差別化を図るため“2018”を付ける、頭に“第〇回”を付ける。西尾氏案は、頭に“奈良市アートプロジェクト”をつける。そうするとアートであることがわかりやすい。他にもあれば意見をいただきたい。 <p>(委員の意見等)</p> <p>萩原委員</p>
--

- ・東大寺を作った経緯として、社会的課題の解決というのがあった。奈良時代に、社会が抱えていた課題や社会不安を踏まえて出来上がってきたものを、もう一度 21 世紀の奈良市でアートという形で呼び覚ましていこうというような大きな話をどこかで入れても良い。前回の「時空を超えたアートの祭典 古都祝奈良」からすると“社会的課題に向き合うアートプロジェクト 古都祝奈良”が一番ふさわしいかと思うが、“社会的課題”が全面に出すぎるのもどうかと思う。

→西尾氏

社会的課題に向き合うことを長期的テーマとするために、文言としてあえて表に出さないという選択肢もある。

西尾氏

- ・美術・演劇両部門の事業名称も付いており、さらに「奈良市アートプロジェクト 古都祝奈良」に文言が付くと混乱を招く懸念がある。

佐々木副委員長

- ・“古都祝奈良2018”とするなら、今後も継続的に“古都祝奈良 2018”、“古都祝奈良 2019”と使用していく方が良い。

→事務局

“2018”だと年度なのか年なのか、分かりにくい。

萩原委員

- ・「古都祝奈良」はすでにイメージが定着している。“2017”と“2018”を並列させるとか矢印にすると、継続的に発展していく感じがする。

→西尾氏

“2017-2018”という表記は、例としてある。

佐々木副委員長

- ・“アートプロジェクト”は入れる。

事務局

- ・サブタイトルは特にこだわらず、それぞれのプログラムタイトルにて社会課題や対象を明確に謳う。最終はチラシ等作る中で、提案する。

(2) 平成 29 年度・30 年度事業計画（案）について

美術部門

西尾氏より説明。

美術部門タイトル「花 Welcome」について

- ・チェ氏は、様々な日常品を大量につなぎ合わせてダイナミックなインスタレーションを展開し、「プラスチックも生き物であり、死なない花である」という一貫性あるテーマを持っている。「古都祝奈良」の“祝”とも通じる、わかりやすいイメージの花をテーマとした。

- ・花は“Welcome”を意味し、誰しもを招き入れるものである。国内外の訪れた人に対する“Welcome”や、奈良に出現した現代アートに“Welcome”など、いろいろな意味がある。
- ・チェ氏が実践されてきたアートを示すわかりやすい言葉であり、かつ深い歴史を持つ奈良の街に合う名前である。

美術部門の構成・内容について

①アート制作・展示「花 Welcome」

- ・美術部門全体のタイトルと同じタイトル。
- ・準備期間が非常に短い、奈良で新しい素材に出会ったことで新作も提案してもらった。(ペットボトルのシャンデリアの作品)
- ・展覧会初日の3月9日は、チェ氏がアートディレクターを務める平昌(ピョンチャン)冬季パラリンピック開会式もあり、注目も高まる。奈良市から「社会課題を乗り越えた先は、世界の平和に繋がっている」ということを発信する。

→佐々木副委員長

日中韓文化大臣会合の時に、東アジア事業を進めることと併せて、2年ごとにあるオリンピック・パラリンピックも協力してやることを合意事項として入れている。この事業は日中韓でやってきたことの継承であるから、そういうことがにじみ出ている感じが良い。

②ワークショップ部門「Happy Happy」

「みんなでプラスチック容器を繋ぎ合わせたりする行為を共有することで、Happy Happy(私の幸せはあなたの幸せ)なんだ」というテーマで、展覧会の作品を市民参加で作成する。

③アートディスカッション「生生活活」

「生生活活」という言葉は、チェ氏の一番のメッセージ「生活こそがアートだ」というものを端的に示したものであり、チェ氏のキーワードとして日中韓で定着している。我々の生活とアートがどう関わっていくのか、奈良におけるアートプロジェクトの今後の展望等を、市長を交えてしたい。

30年度の計画について

- ・単発の展示や一定期間だけのリサーチでは、芸術が地域に根付くことは難しい。そのため、30年度は継続してチェ氏とともに「生活こそがアート」という視点を引き継ぎ、「生活とアート」というコンセプトを広めていきたい。
- ・また、リサーチベースの中堅アーティスト数名に奈良のコミュニティの中で、奈良の魅力を発掘していくようなことも行い、生活の中で奈良の歴史と未来を繋げていくようなことができないかと思っている。

→佐々木副委員長

アーティストインレジデンスに繋がっていきそう。アーティストインレジデンスの全国ネットワークを作ろうと思っている。奈良市もやってみてはどうか。

→仲川委員長

奈良県が計画している国際芸術家村のアーティストインレジデンス関連は何か情報はるか。施設の工事は進んでいるが、何をすることが見えてこない。完成するのなら使っていければ良いと思う。

→西尾氏

アーティストインレジデンス研究会に参加しているが、今は運営の枠組みを検討している段階で、企画はまだこれからである。複合的施設であり、文化財施設、美術用スタジオ3~4個、展示室が

いくつかある。アーティストインレジデンス施設はそのごく一部である。全体像はまだわからないが、道の駅も兼ねるといふ話である。演劇の舞台はない。

(委員の意見等)

仲川委員長

- ・準備期間も短く予算制約も多いが、非常にクオリティが高い。

佐々木副委員長

- ・チェ氏は昨年「東アジア文化都市 2017 京都」にも参加されており、それとの関連性もあって良い。「東アジア文化都市 2016 奈良市」で展示された蔡國強氏の船の作品は京都に行っているし、行き来している感じが良い。

演劇部門

田上氏より説明。

- ・「東アジア文化都市 2016 奈良市」事業で制作した「ならのはこぶね」を再演する。昨年との違いは中学生も参加できること。昨年の参加者と初めての人のコラボとなり、新たなクリエイションとなる。
- ・演劇を手段として、自分たちが住んでいる奈良や歴史を、今の身体をもって発信してみようという意図で作った。地域の文化を自分の口で語るができる大人になって欲しいという願いを込めている。
- ・昨年の制作条件として大きな舞台セットを組まないということがあり、持ち運びしやすい作品が出来上がった。舞台芸術は観客に対して発信力が高く、今後毎年事業が展開されるのであれば、持ち運びできる演劇という形態の強さを活かして全国で上演し、発信できることを期待している。

→佐々木副委員長

東アジア文化都市事業は、今年は金沢市が実施している。金沢市民芸術村を会場として、奈良の高校生たちを連れていくのも良いかもしれない。金沢の実行委員会にも提案してみる。また、来年は豊島区で、演劇中心の事業となる。これまでは各都市単発でやってきているが、作ったコンテンツを毎年繋いでいくと、都市も広がり、かなり面白いことになる。

基本構想 4 実施体制

事務局より説明。

- ・「事業の実施にあたっては～」箇所は「プログラムディレクター」という表現で統一したい。

→佐々木副委員長。

プログラムディレクターはプログラム単位のディレクションであり、プログラムディレクターと兼務でも良いが全体のディレクターも必要。「ディレクターもしくはプログラムディレクター」としておくのが適切である。

事業計画

事務局より計画案にのっとり説明。

- ・演劇とアート会場が同じならまちセンターなので、演劇の会場の中にアート展示をするなど、互いを関連

させることも考えている。

西尾氏

- ・事業計画（A）美術部門の現時点での変更点があり、（2）ワークショップ期間の最終日は3月8日（3月25日も単発で有り）になることがほぼ確実になっている。

（委員の意見等）

佐々木副委員長

- ・ならまちセンターが継続的にアート拠点になると良い。

4 閉会

- ・本日承認いただいた事業計画に基づいてスケジュールに沿って実施していく。チラシ等やイベント案内も随時お送りする。
- ・次回開催については事務局より連絡する。